

は 1/2 h にあり、血清 12.9  $\mu\text{g/ml}$ 、扁桃 1.4  $\mu\text{g/g}$  であり、その後時間の経過とともに速やかに消退した。

ABPC 50 mg/kg i.m. 家兎における成績も、ピークは 1/2h、血清 40.2  $\mu\text{g/ml}$ 、扁桃 8.1  $\mu\text{g/g}$  であり、時間の経過とともに速やかに消退した。

Cefazolin (CEZ) 20 mg/kg i.m. 投与時、人扁桃、血清ともにピークは 1 h で、血清 30.4  $\mu\text{g/ml}$ 、扁桃 12.9  $\mu\text{g/g}$  であつた。その後の消退も緩やかで、6 h で血清 2.7  $\mu\text{g/ml}$ 、扁桃 0.5  $\mu\text{g/g}$  を示した。し

かし、家兎に CEZ 50 mg/kg i.m. 投与時の成績は、ピークは 1/2 h で血清 36.5  $\mu\text{g/ml}$ 、扁桃 13.5  $\mu\text{g/g}$ 、4 h 値は血清 0.92  $\mu\text{g/ml}$ 、扁桃 0.83  $\mu\text{g/g}$ 、と、消退は速やかであつた。

次に、正常扁桃と急性炎症扁桃とで扁桃組織移行濃度を検討した。ABPC, CEZ, DKB の 3 薬剤で検討した結果は、いずれも、急性炎症扁桃での組織移行濃度の方が有意に高い値を示した。

## 溶連菌感染症における C-polysaccharide 抗体価の測定

関 谷 芳 正 ・ 武 藤 允 人  
野 田 勝 ・ 馬 場 駿 吉\*

溶連菌感染の目安として、今まで ASO, ASK などが使われてきた。しかしそれらすべては溶連菌菌体外産生物に対する抗体価を測定するものであつた。そこでわれわれは、菌体成分として溶連菌の群特異性と関与している C-poly に対する抗体価の測定を試みた。

方法は、家兎腹腔に溶連菌を投与、投体価を希釈血清と、溶連菌超音波処理後ホルムアミドにて抽出した C-poly で感作した羊赤血球との間の凝集反応のみたものである。

結果は、A, C, G 群それぞれで感染させた家兎において、その群に対する C-poly の凝集価は 1 週後より上昇し、3 週以後には  $2^{10}$  以上になつたが、他の群の C-poly に対する凝集価もほぼ同じ時期より上昇し、A 群においては G 群の C-poly に対しても  $2^5 \sim 2^8$ 、C 群の C-poly に対しては投与前と投与後では  $2^1 \sim 2^2$  で上昇を認めなかつた。同様 C, G にて感染をおこさせた家兎においても他の群に対する凝集価の

上昇をきたした。このように他の群に対する凝集価の上昇がみられた事は、C-poly の精製が、われわれの方法では不十分で、C-poly 以外に共通抗原性をもつた物質が存在しているためと考えられる。そのため、感染をひきおこした溶連菌の群を血清より決定する方法としては充分なものとは言えないが、菌体成分に対する抗体価の測定法として溶連菌感染症、およびその二次疾患に対する一つの目安となりうるのではないかと考えている。

### 質 疑 応 答

出口 (東京総合臨床検査センター) 扁桃病巣部位からは A 群, C 群, そして G 群の検出される頻度が高い。(成人の場合) しかし培養検査では一定の検出限界があるので C-polysaccharide 抗体価の測定は重要である。従つて群別の特異性を欠いても診断的意義が高いといえる (追加)。

\* 名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室